

過去の危機様態における相互性の程度と自我機能

—ロールシャッハ反応に投影された自我の強さ—

中 込 四 郎・吉 村 功*

Differences in ego function between high and low mutuality in past crisis modes

—On ego strength projected into Rorschach responses—

Shiro Nakagomi and Koh Yoshimura

This report is one in a series of studies examining the hypothesis that mutuality in past crisis modes is the key factor contributing to personality development. Here the relationship between the subjects' degree of mutuality in past crisis modes and their ego strength projected into Rorschach responses is examined.

Two subject groups were selected from a total of 80 athletes according to their degree of mutuality as determined by Nakagomi & Suzuki's scale of ego identity formation process: the high mutuality group consisted of the twelve subjects with the highest scores (H-M group) and the low mutuality group the twelve with the lowest scores (L-M group). The Rorschach protocols of these two groups were analyzed by Klopfer's Rorschach Prognostic Rating Scale (RPRS). Both the raw and weighted scores of Sum (sumation), M (human movement response), and Col (color response) in the RPRS's subitems revealed significant differences between the H-M and L-M groups, and the raw score of FL (form level) was nearly significant. It was found that the H-M group was superior to the L-M group in regard to the above items. In addition, the two groups were compared by general Rorschach scoring categories. The H-M group was significantly higher than the L-M group in terms of M, FC, H% and DR, and the L-M group was significantly higher than the H-M group in terms of D%, F% and A%.

These results suggest that the H-M group has healthier ego strength than the L-M group. However, it may not be concluded from this study that high mutuality in past crisis modes has a determinant effect on the development of ego function. That is, we can not know the cause-effect relationship between the development of ego function and mutuality in the crisis mode. High mutuality in coping behavior with each crisis requires healthier ego strength, and provides many opportunities for utilizing ego function. It is concluded, therefore, that high mutuality in crisis coping behavior offers greater potential influences on the development of ego function than does low mutuality.

Key words : Ego Function, Rorschach, Crisis Mode, Mutuality, Identity

* 筑波大学体育研究科

序

人格発達には様々な要因が関わり、そしてそれらが複雑に影響しあっている。人格変容理論の中でも、本研究は以下のような者たちの主張に強く影響を受けている。

鈴木(1985)³⁰⁾は、人格変容を不適応的変容と適応的変容の2方向に分け、その原因・条件について述べている。後者の変容においては、①心理療法による治療的変容、②危機を克服することによる克服的変容、③成熟的変容の3つの原因・条件をあげている。さらに、Erikson⁹⁾の漸成原理(epigenetic principle)を背景とする心理社会的発達の分化図式の中では、青年期にさしかかり、自我同一性形成といった発達課題に積極的に取り組むのには、それまでの発達課題—それは発達危機とも考えられる—に対して相互的に解決をはかってくるのが重要であると主張している³¹⁾。また、西平(1959, 1973)^{26,27)}の青年期心性への理解、山科(1986)³³⁾の人間発達への哲学的考察は、弁証法理論を下敷きにしている。

危機を契約として人格発達を説明しようとする立場、そして変容を引き起こす過程として、「相互性」(mutuality)を想定するのは弁証法的と考えられる。中込らはこれまでに、自我同一性形成への問いかけをもたらす13の領域を設定し、そこでの危機様態における相互性の程度と自我同一性達成の程度との間に積極的関係を確かめた¹⁹⁾。また、青年期後期にある運動選手の自我同一性の混乱を呈した相談事例の検討を通じて、過去の危機様態での相互性の希薄さを、生育史の中に一貫して認めてきた^{22,23,25)}。

さらに、危機が人格変容・発達要因となりうるものが、種々の立場から主張されている²¹⁾。行動療法を除く他の心理療法理論では、治療を通じて来談者が「自己洞察」を得、その結果人格変化(治療)が生じると考えている。これはカウンセラーとの治療的人間関係の中で起こることである。このような治療的人格変容が、危機を契約とした対処行動においても一部期待することができるのではないかと考えられる。

中込(1986)²⁰⁾は先に、危機様態における相互性の程度とロールシャッハテスト(以下、ロ・テストとする)に投影された対象表象(object representation)の発達水準との関係について報告した。結果は有意な差を認めるまでには至らなかつ

たが、高相互性群の方が低相互性群よりも対象表象の高い発達水準にあることを明らかにした。その中では相互性得点(crisis, exploration, commitment)の3水準の合計)のみを手がかりとして対象者の抽出を行っており、また45名の対象母集団から各群8名を被験者としており、その数は十分とはいえなかった。そこで本研究では抽出母集団をさらに大きくし、そして対象者の代表性を高めるために抽出基準の修正を行なうことにした。こうして得られる相互性の程度に基づく2群の対象者における自我機能(ego function)の差異を検討することが本研究の目的である。

危機を相互的に乗り越えるためには個体の側の要因の一つとして自我機能の健全度がすでに要求されているといった見方もある。しかし、自我機能の状態とは別に取り巻く環境が、抑制あるいは促進要因として働き、相互性の程度を規定することも考えられる。したがって、それまでに形成された人格機能に支えられ、危機への対処行動を起こしたとしても、他の要因によりそこでの対処行動が変化していくことになる。さらにその後経験される危機によって、ある者は相互的な対処行動を強化(発達)されたり、修正(後退)を迫られたりする。こうした危機経験が逆に、自我機能の発達に影響していくのではないかといった立場をここではとっている。このようなことから本研究では、これまでの危機様態での相互性の程度と人格発達の指標としての自我機能との関係を確かめることになる。なお、以下で説明が加えられる自我機能を査定するロ・反応指標の他に、基礎的なロ・反応指標に関する分析も施すことにより、解釈への補助資料を得た。

これまでに、自我機能の査定については、心理学領域を中心に数多くのテストが開発されてきている³²⁾。本研究ではKlopperら(1951)¹²⁾が開発したロールシャッハ予後評定尺度(Rorschach Prognostic Rating Scale, これを通常RPRSと略記し、以下ではこのように表記する)を適用することになる。RPRSは本来、心理療法の予後判定を主たる目的に作成されており、臨床尺度としての有効性についてはかなり支持されている^{2,6,7,29)}。しかし、本尺度は予後判定のサインとしてだけでなく、自我の強さを測定するための1つの有効な尺度としての見方も強まってきている^{16,31)}。

以上のように、本研究では危機様態における相

互性の程度を、ロ・テストに投影された自我機能から検討することになる。本研究においては、危機状態における相互性が人格発達に及ぼす影響について、因果関連的に討議を加えることはできないが、両者の関連性を推論していく基礎資料を提出することができる。

方 法

対象者の選択

過去5年間に種々の目的から、遠藤の自我同一性尺度⁴⁾、中込らの自我同一性形成過程尺度¹⁹⁾、そしてロ・テストの3種類の心理テストを実施してきた。同一の対象者よりこれら3つの心理テストからの情報提供可能な者は80名であった²⁰⁾。なお、ロ・テストの施行は片口法¹⁰⁾に従って個別に行われた。この80名の対象者から、自我同一性形成過程尺度より求められる、過去の危機状態での相互性の程度に基づき、24名がさらに抽出された。これらの対象者は、相互性の高いと判定された高相互性群 (High Mutuality G.: 以下、H-M群とする)、そして相互性の低い低相互性群 (Low Mutuality G.: 以下、L-H群とする) 各12名から構成されている。これは母集団の上・下位各15%に相当する。前述したように両群の抽出にあたっては、相互性得点だけでなく、危機への対処行動の状況説明に関する記述 (作文) ²⁴⁾を判定の手掛りとしている。両群の特徴は Table 1 に示すとおりである。先の報告 (1986) ²⁰⁾で検討された対象者と相互性得点の上では近似しているが、さらに両群の相互性に関わる質的相違も保証されていることになる。低相互性群は危機意識の程度 (crisis) において、高群より顕著に低い値を示している他に、その対処—解決に向けての探求・努力: exploration—において、消極的であったことを特徴と

している。つまり、危機の程度と探求・努力の程度の比率 (crisis : exploration) が接近するほど積極的であったと考えるからである。抽出された対象者の年齢は <M=21.5, SD=2.54, Range 20—30> であった。また、両群間の年齢構成はほぼ等しかった。

RPRS のスコアリングシステム

この RPRS は先にも述べたように、自我の強さやその健康さの指標とされている。Klopper¹³⁾ (pp. 561-98) は、自我を組成する機能として、現実検証能力 (reality testing)、情緒の統制 (emotional integration)、自己実現 (self realization)、現実状況の統御 (mastery of reality situation) の4つの要因を想定している。そして、これらの機能を総合的にとらえるためにロールシャッハ反応を、[M] 人間運動反応、[FM] 動物運動反応、[m] 無生物運動反応、[Sh] 濃淡反応、[C1] 色彩反応、[FL] 形態水準の6個の下位項目を設定し、RPRS を作成した。これらの理論的背景には、彼の自我機能の発達図式²⁵⁾に要約されるような自我心理学がある。この RPRS の得点化への具体的な方法については、Klopper ら (1951) ¹²⁾の発表したものを河合¹¹⁾、小川²⁶⁾等によって翻訳されており、それを参考にした。

スコアリングの方法

各対象者のロ・反応プロトコルに RPRS を適用する前に、スコアリングマニュアルに従い、他の2事例のプロトコルの分析を通して評定のトレーニングを行った。この段階では、第一研究者がロ・テストならびに本分析に習熟していることから、共同研究者に解説を加えながら共通理解を深めていった。

その後2人の評定者は独立して、本対象者のうち12名のロ・反応プロトコルの分析を進めていっ

Table 1. Differences in ego identity and mutuality scores between two groups.

		Identity Score	Crisis	Exploration	Commitment	Mutuality Score
High	M	67.8	15.1	14.0	13.0	44.3
Mutuality G.	SD	6.65	2.61	2.66	3.30	10.28
(n=12)						
Low	M	61.9	7.8	4.1	4.0	15.9
Mutuality G.	SD	10.13	2.49	1.78	1.71	3.73
(n=12)						
t			**	**	**	**

** P < .01

た。なお、第一研究者は本対象者らの相互性に関する属性を知っていたが、共同研究者はそれらの情報については知らされておらず、盲検法 (blind analysis) で分析を行っていくこととなった。各分析カテゴリーごとに、両評定者間の評定一致率を求めた。分析対象となった反応の評定では、[m] の67%から [Col] の86%、そして加重点における各カテゴリーの総点-FL は算出方法の特性からいって、一致することは極めて低くなることから対象外とした。-では、[FM]75%から[M]100%の範囲であった。その平均一致率は78%であり、評定の信頼性が満足される値であると考えられる。スコアリングの不一致の認められた反応については、その後、両評定者間で合議し解決をはかった。また、残りの12事例については、合議しながら評定を行っていった。なお両評定者間で合議の結果、一致をみるることができない場合は、第一研究者が最終判定を下した。RPRS 以外のスコアリングに関しては片口法¹⁰⁾に従って、第一研究者が単独に行っていた。

結果と考察

1) RPRS について

Table 2は自我同一性形成過程尺度から得られた相互性得点、ならびに RPRS を構成している各要素についての粗点、加重点の値を個人別に示したものである。そして、H-M群、L-M群の両群の平均・標準偏差を求めたものが Table 3である。

両群の総反応数(R)については、H-M群(M=21.9, SD=6.80), L-M群(M=18.7, SD=7.02)であった。両群間のRの平均値ではH-M群の方がやや高い値を示しているが、有意差が認められるほどではなかった (t=1.08, p>.20)。したがって両群間の各スコアの出現頻度の差に与える総反応数の影響は比較的少ないと判断できる。また、今回 RPRS を適用した対象群の結果は、先の報告 (中込・鈴木, 1983)¹⁰⁾で得られた値と近似しており、評定の信頼性が間接的に支持されたものと考えられる。

RPRS の各要素の粗点、および加重点について両群間の比較を、Yates の修正によるカイ 2 乗検

Table 2. RPRS raw and weighted scores of each subject.

Class	Case	Mutuality Score	R	Raw Score								Weighted Score							Group
				M	FM	m	Sh	Col	FL	Sum	M	FM	m	Sh	Col	FL	Sum		
H-M	1	57	30	2.0	4.8	1.0	0	4.5	1.17	13.47	1	1	1	0	2.25	0.17	5.42	III	
	2	35	33	5.8	9.1	1.0	1.5	1.5	1.29	20.19	3	1	1	2.25	2.25	0.79	10.29	II	
	3	41	23	4.0	3.0	0	-0.5	2.5	1.24	10.24	2	1	0	-1.5	2.5	0.24	4.42	III	
	4	48	18	3.7	3.7	2.0	2.0	1.0	1.33	13.73	2	1	1	2.0	1.5	1.33	8.83	II	
	5	46	19	4.0	1.0	0	3.0	3.5	1.47	12.97	2	0	0	3.0	2.63	1.47	9.10	II	
	6	40	10	4.8	1.7	0.5	1.0	0	1.80	9.80	2	0	0	3.0	0	1.80	6.80	III	
	7	39	28	8.3	8.8	1.0	0	1.5	1.50	21.10	3	1	1	0	2.25	1.50	8.75	II	
	8	51	18	3.6	1.0	1.5	1.0	1.0	1.44	9.54	2	0	1	3.0	3.0	1.44	10.44	II	
	9	68	22	4.8	4.2	3.5	1.0	1.0	1.16	15.66	2	1	2	1.5	1.5	0.66	8.66	II	
	10	37	27	5.0	3.8	0	1.0	-0.5	1.00	10.30	3	1	0	3.0	-1.5	-0.50	5.00	III	
	11	33	22	4.6	6.9	0	0	1.0	1.39	13.89	2	1	0	0	3.0	0.89	6.89	III	
	12	37	16	1.0	2.5	0	2.0	1.5	1.14	8.14	1	0	0	3.0	2.25	1.14	8.39	II	
L-M	13	19	13	0.8	5.9	0	0	0.5	1.35	8.55	0	0	0	0	1.5	1.35	2.85	III	
	14	11	22	1.0	4.0	1.0	1.0	1.0	1.30	9.30	1	0	1	3.0	3.0	1.30	9.30	II	
	15	10	41	4.5	3.6	0	0	2.5	0.77	11.37	2	1	0	0	1.88	-0.23	4.65	III	
	16	14	16	1.4	2.7	0.5	1.0	-1.0	0.94	5.54	1	1	1	3.0	-3.0	-0.06	2.94	III	
	17	22	15	3.4	0	0	0	0.5	1.30	5.20	2	-1	0	0	1.5	1.30	3.80	III	
	18	17	14	2.7	1.0	0	0	2.0	1.00	6.70	1	0	0	0	2.0	0	3.00	III	
	19	13	19	3.0	3.1	0	1.0	0	0.98	8.08	1	1	0	1.5	0	-0.02	3.48	III	
	20	16	21	0	1.0	1.0	0	1.0	0.98	3.98	0	0	1	0	3.0	0.98	4.98	III	
	21	21	16	1.5	2.7	0	0	0	1.22	5.42	1	1	0	0	0	0.72	2.72	III	
	22	16	19	1.7	0	0	0	0	0.66	2.36	1	-1	0	0	0	0.16	0.16	IV	
	23	18	16	4.4	1.7	0	0.5	0.5	1.34	8.44	2	0	0	0.75	1.5	1.34	5.59	III	
	24	14	13	1.5	2.2	0	1.0	0	1.12	5.82	1	1	0	3.0	0	-0.38	4.62	III	

Table 3. Comparison of H-M group and L-M group.

Item	Class	C.O.P.	H-M group (n=12)		L-M group (n=12)		ϕ	x^2
			Mean	SD	Mean	SD		
RPRS Raw Score								
M		2.9	4.3	1.82	2.2	1.43	0.507	**
FM		2.8	4.2	2.77	2.3	1.73	0.333	
m		0.9	0.9	1.07	0.2	0.40	0.354	
Sh		0.9	1.0	1.02	0.4	0.48	0.333	
Col		0.9	1.5	1.39	0.6	0.95	0.507	**
FL		1.1	1.33	0.212	1.08	0.229	0.385	*
Sum		10.0	13.25	4.111	6.73	2.507	0.676	**
RPRS Weighted Score								
M		1.9	2.1	0.67	1.1	0.67	0.655	**
FM		0.9	0.7	0.49	0.3	0.75	0.251	
m		0.9	0.6	0.67	0.3	0.45	0.258	
Sh		1.6	1.60	1.586	0.94	1.323	0.331	
Col		2.1	1.80	1.320	0.95	1.665	0.507	**
FL		1.0	0.91	0.676	0.54	0.689	0.169	
Sum		5.1	7.65	2.033	4.01	2.184	0.667	***

*** $P < .01$ ** $P < .05$ * $P < .10$

定によって行なった (Table 2) ⁴⁶⁾。統計的に有意な差の認められた項目は、粗点では、M ($P < .05$)、Col ($P < .05$)、Sum ($P < .05$) であり、加重点の場合では、M ($P < .05$)、Col ($P < .05$)、Sum ($P < .01$) であった。また、統計的に有意とまではいえないがその傾向を示すものとして、FLの粗点 ($P < .10$) をあげることができる。

まず、RPRSの結果の解釈においては、総点 (Sum) に注目しなければならない。Klopfersによると、加重点の合計 (Sum) は自我の諸機能の統合状態を反映するとし、それぞれの自我機能に関係しているのがMをはじめとする各カテゴリーである。そしてこの加重点の合計が、自我の強さや健全度を測定しているといった解釈仮説を提出している。このことは、その後多くの研究によって支持されているようである。したがって上述の結果は、過去の危機状態での相互性が高い者たちの方が、自我の強さといわれる精神機能全般において、相互性の低かった者たちよりも優れていると解釈される。こうした両群の自我機能における特徴差が、危機状態の違いによってもたらされた結論することはできない。少なくとも、自我の健全度の高い高相互性群の方が、精神的負担への耐性があり、今後危機に遭遇した場合、低相互性群の者たちよりも積極的な対処行動を起こすことが

予想される。

次にRPRSを構成している各成分について検討する。Klopfersの自我発達図式 (Klopfers¹³⁾: p. 569) に従うと、[Sh] 濃淡反応は自我機能の発達からみると、乳幼児期における基本的な安全感の状態を反映しており、これは自我の健全な発達の土台となっているものである。このような基本的な次元、ないしは発達早期に形成されるとする自我機能に関して、両群を比較したところ明確な差はみられないようである。

[M] 人間運動反応は、内的安定性 (inner stability) の指標で、情動の内的統制の資質をみるものである。また、Mは自己受容とか共感性を示すとともに、それらを背景としてさらに高次の自己実現の能力とも関連すると考えられている。危機状態にあてはめるなら、高相互性群の者の方が、自分の状況をよりよくしたいという自己実現に向かった成長動機が高いとも考えられる。こうした解釈仮説をもつM反応の他に、[Col] 色彩反応においても両群間で有意な差が認められている。一般に色彩反応は、環境からの刺激に対する反応性の度合いと性質に関係しており、この反応の値が高いことは、情緒的衝撃に対する統制された、しかも敏活な反応性を意味していることになる。つまり、危機状況での情緒的混乱は、高相互性群の

方が低いことになる。

前述したように、[Sh]から探られる自我機能は発達早期に獲得されるものであるが、[Col]は潜在的なものよりも、その時の現在の状態を反映する面が強いと言われている(河合, 1969¹¹⁾)。精神療法による人格変容(治療効果)をこのRPRSで確かめた場合、[Sh]よりも[Col]の増加的变化の大きいことが認められている。仮に、危機様態が人格変容に影響するとしても、それは人格の深層にまで及ぶものではないようである。

[FL]は自我の代表的な機能の1つである現実検証(reality testing)の能力を反映していると言われている。両群間の比較では、粗点においてのみ有意な傾向が認められた。つまり、高相互性群の方が現実検証能力においてやや優れていることになる。Klopper (1955)¹⁴⁾は、この現実検証能力の障害と自我防衛(ego defence)の強さとの関係を図示(p. 312)¹⁵⁾し、健常者から神経症者の間では、reality testingの減少に伴ってego defensivenessになると主張している。このような主張を下敷きにすると、[FL]に関する結果は次のような解釈を試みることができる。葛藤状況(危機)に立たされた時、精神内界の安定を果すために低相互性群の方がより防衛的行動をとりうることが予想される。したがって、危機への対処行動において、自我が積極的に対象に働きかけ、問題を解決し安定を求めるといったものでなく回避的行動になる。また、現実検証能力に優れていることは、MやCol反応から推論する顕在化された行動が、外界に対して適応的であることを保証するものでもある。

2) 基礎的なロールシャッハスコアについて
両群のロ・反応資料に対しては、RPRSの他に基礎的なロールシャッハスコアについても分析を行った(Table 4)。

個々の反応カテゴリーについて両群の結果を比較したところ、次のようなカテゴリーにおいて有意な差を認めることができた。M ($P < .01$), FC ($P < .05$), H% ($P < .05$), DR ($P < .05$)に関しては、H-M群の方が高い値を示した。そして、Dd% ($P < .05$), F% ($P < .01$), A% ($P < .05$)においては、L-M群が高い値を示した。

先のRPRSにおいてはM反応の結果を、H-M群の成長動機の強さのあらわれであると解釈した。ここではM反応にH%の結果を加えることにより、

H-M群の方が対人関係面における関心の強さや疎通性の良さを特徴とすることが考えられる。これは中込ら(1986)が報告した、高相互性群が低相互性群よりも対象表象(object representation)の発達水準が高いといった結果を支持している。

M反応についてはΣCとの比率に注目することにより「体験型」¹⁾、両群の人格特徴における違いを付け加えることができる。M:ΣCは〈H-M群; 5.4:2.5, L-M群; 2.3:1.5〉、両群とも基本的には内向的体験型の比率を示しているが、その傾向はH-M群の方が高いと言える。さらに、L-M群はF%やA%が高く、DRが低い値を示している。これらの結果より、相対的にはあるが、低相互性群の者の方が高相互性群よりも平板な内面的世界や、外界への消極的な働きかけを行なうが想像される。

基礎的なスコアにおけるF+%, ΣF+%, R+%は現実検証能力のサインである。RPRSでの現実検証能力では、両群間の粗点において明確な差を認めることができたが、基礎スコアにおいては、ともに有意差を得るまでには至らなかった。これはKlopper法と片口法で採用されている得点化の違いによるところが大きいといえる¹⁶⁾。また、健常者での出現頻度は極めて低いといわれるRej(反応拒否)が、両群の対象者に記録されている(H-M群; 3人, L-M群; 2人)。運動選手におけるRejの解釈においては、中込ら(1989)²⁴⁾が指摘したように、通常解釈仮説をそのまま当てはめ、人格像を描くことは避けた方がよいようである。

以上のように、過去の危機様態における相互性の程度と、ロ・テストに投影された自我機能(RPRS)との間に積極的な関係を認めることができた。高相互性群は自我の強さ・健全さにおいて、低相互性群よりも優っていた。そして、その他の基礎的なロ・反応スコアによる両群間の比較においても高相互性群の自我機能の強さを支持することができた。

自我同一性形成過程尺度の中で設定された危機領域の数は、スポーツ関連領域(6)、日常生活関連領域(6)、そして共有領域(1)であった。したがってスポーツ関連領域での危機様態で高い相互性を経験してきた運動選手たちは、自我機能において優れていたと言い切ることはできない。しかし先の報告で、運動選手はスポーツ関連領域での crisis,

Table 4. Differences in Rorschach scoring categories between two groups.

Categories	H-M group (n=12)		L-M group (n=12)		t
	M	SD	M	SD	
R	21.9	6.80	18.7	7.02	
Rej	3/12 (25.0%)		2/12 (16.7%)		
RT (Av.)	119.6"	76.27	76.2"	46.31	
R ₁ T (AV.)	21.3"	9.95	28.8"	30.89	
R ₁ T (Av. N.C.)	17.8"	7.94	23.8"	24.05	
R ₁ T (Av. C.C.)	24.8"	14.25	33.0"	37.82	
W : D	16.0 : 4.3	6.25, 3.67	11.6 : 4.3	6.93, 3.58	
W%	73.8	17.15	61.1	22.15	
Dd%	5.3	4.16	12.2	10.27	*
S%	2.4	3.58	2.0	6.93	** <M>
W : M	16.0 : 5.4	6.25, 2.71	11.6 : 2.3	6.93, 1.44	
M : ΣC	5.4 : 2.5	2.71, 1.27	2.3 : 1.5	1.44, 1.32	
FM+m :	5.6 : 1.5	3.53, 0.85	3.6 : 1.5	2.10, 0.85	
Fc+c+C'					
VIII+IX+X/R	31.5	5.65	32.2	8.91	
FC : CF+C	1.3 : 1.6	1.10, 0.96	0.5 : 1.2	0.58 : 1.12	* <FC>
FC+CF+C :	2.9 : 1.5	1.62, 0.85	1.7 : 1.5	1.45 : 0.85	
Fc+c+C'					
M : FM	5.4 : 4.5	2.71, 3.17	2.3 : 2.9	2.22 : 1.44	
F% / ΣF%	33.8/93.8	15.77, 7.18	55.3/93.5	17.76/4.62	** <F%>
F+ % / ΣF+ %	88.6/90.0	14.96, 6.97	83.1/86.8	16.27/11.18	
R+ %	84.5	10.96	81.0	13.25	
H%	34.8	13.09	22.6	11.25	*
A%	38.8	12.01	52.4	17.18	*
At%	2.3	3.39	0.3	0.87	
P (%)	4.8 (24.1)	1.34 (10.60)	5.3 (29.8)	1.36 (9.43)	
Content Range	6.8	2.67	5.8	2.59	
Determinant Range	6.4	1.51	5.0	1.35	*

** P < .01 * P < .05

exploration, commitment の水準が、日常関連領域より有意に高いことが認められており、本結果がスポーツ経験と関わりの強いことが考えられる。勿論、本研究方法ならびに研究結果からは、危機への対処行動において相互性を働かすことが、自我機能の発達に対して決定的な影響力をもつ、つまり、両者の因果関連性について結論付けることはできない。本論文の考察では危機様態における相互性を、両群間で差の検出されたロ・テスト指標に付された解釈仮説より説明し、そしてその当てはまりを確認した。相互性の高い対処行動では、

上述してきたような自我機能が必要とされ、また行使する機会が多いと言える。

まとめ

過去の危機様態における相互性の程度と自我機能の強さとの間に関連性を認めることができた。危機事象から遠ざかることなく危機解決に向けての可能性を模索し、また、危機を契機として自己洞察を深めていくような対処行動、つまり相互性を通して自我の強化がなされていくと考えた。

本論文では危機様態に関する記述を資料に加え、

対象者の抽出を行なってきた。今後は、対処過程をさらにきめ細かく調査すると同時に、臨床事例を通して、危機（主訴）を契機とした治療過程を深く検討する必要がある。上述の主張をさらに確認していくことになる。

付記：本研究の一部は、日本スポーツ心理学会第16回大会（東京）にて発表した。

注

注1) Eriksonは自身が想定した8つの心理社会的発達課題の解決様式として、常に「相互性」を基盤に乗り越えられることを理想としている。例えば、成人期の発達課題である「生殖性」について、母親は子どもの養育を通して子どもの発達と同時に、自己の成長を実現するとしている。Lewin (1979) ³²⁾は、こうした「与えて得る」関係を、「生の弁証法」あるいは「対人関係の弁証法」と読んでいる。このような関係が成立するためには、主体と対象が一方的優位関係であってはならず、両者が相互に影響を及ぼす互角の関係であることが要求される。本研究における危機様態での相互性は、同一個人内における主我-客我の関係にまで拡大している。

注2) 自我を機能(function)としてとらえようとする立場は、言うまでもなく精神分析的自我心理学(ego psychology)である。自我心理学の発展により、一般心理学領域で扱われている問題への接近が可能となったといわれている。

自我の強さないしは自我機能に関する尺度には次のようなものがこれまでに開発されてきている。質問紙法としては、Barron(1953) ¹¹⁾のEgo strength (Es) スケール、Block (1965) ⁹⁾の自我弾力性(ego resiliency) スケール、そしてCattell (1958) ⁹⁾によるC-尺度(ego weakness)がある。また投影法としては、本研究で用いられたRPRSの他に、Last & Weiss (1976) ¹³⁾によるRorschach Ego-Strength Scale、TATより自我の強さを求めたHerron (1965) ⁹⁾の尺度、等がある。

注3) 危機は人格発達上の「転換期」という意味と、社会適応の観点から、不適応状態や精神医学的疾患に発展する「危険な状況」という2つの意味でとらえられる(長尾, 1989¹⁷⁾)。Eriksonの言葉を借りるなら、正常な発達の危機(normative crisis)と、神経症および精神病性の危機(neurotic and psychotic crises)ということになる。もちろん後者のタイプの危機であっても、治療を通じて危機が人格発達への契機となることも十分可能であり、実際の臨床場面で

もしばしば経験することである。本研究で用いた尺度は前者の立場をとっており、また本被験者の全てが精神医学的疾患を有することのない健常者であった。

注4) 自我同一性形成過程尺度の中では、crisisの問いかけに対して、2点とした領域(迷ったり、悩んだりした経験がかなりある)のみについて危機様態に関する具体的説明を求めている。「その時期、出来事の具体的内容、克服(解決)の有無およびどのように対処したか」等の説明を付し、作文を課した。分析の視点としては、探求・努力の広がりや深まりに注目した。つまり、危機の解決の過程で、その対象との積極的相互交渉が認められたり、危機を契機として発達主体者が内省するような局面が生じた場合、相互性が高いと考えている。しかし、さらに危機様態に関するより妥当な操作的定義づけをはかり、情報収集の方法、評価の仕方等について課題を残している。

注5) Klopferによる自我機能発達の図式は、以下のようなものである。

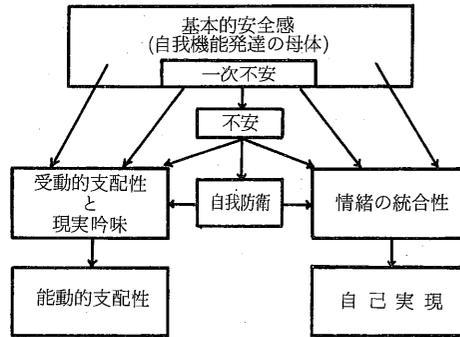


Fig. 1 Development of ego function (Klopfer: 1954¹³⁾)

注6) RPRSを適用して求められる各尺度値は間隔尺度と考えられるが、個々の値は総反応数(R)により若干変動し、また、特に加重点においては正規型の分布が保証されないことから、カイ2乗検定により両群間の有意性を検討した。両群の差異を示すためにTable 3の中ではM, SDも示しておいた。

注7) Klopferは以下のように、現実検証能力の障害と自我防衛の強さとの関係を図示している。X軸は現実検証の障害の程度を示し、Y軸に自我防衛の程度を示している。本研究対象者では図中のOからAまでが該当することになる。わずかの範囲ではあるが、防衛が高まることにより、

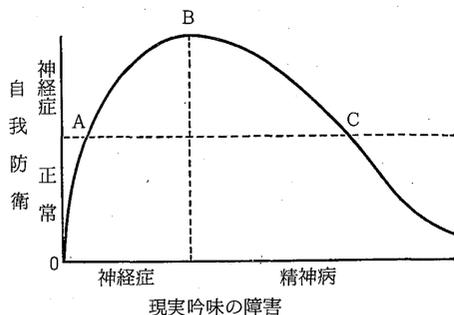


Fig. 2 Conceptual schema of the linkage between ego defensiveness and impairment of reality testing (Klopfer: 1955)

現実検証を若干低下させることになる。

注8) Klopfer法における形態水準(form level)の評定は、0.5点きざみで最低-2.0から最高5.0の範囲で行なわれる。片口法では、+(優秀水準), ±(良好水準), 干(許容水準), -(不良水準)の4段階である。健常者を対象とした時、Klopfer法による形態水準評価ほどには片口法の場合、弁別力が低くなることが考えられる。

参考文献

- 1) Barron, F., "An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy," *Journal of Consulting Psychology*, 17: 327-333, 1956.
- 2) Cartwright, R.D., "Predicting response to client-centered therapy with Rorschach prognostic rating scale," *Journal of Consulting Psychology*, 5:11-17, 1958.
- 3) Cattell, R.B., *The sixteen personality factor questionnaire*, Champaign, III: Institute for personality and ability testing, 1958.
- 4) 遠藤辰雄(編), *アイデンティティの心理学*, ナカニシヤ出版, 1981.
- 5) Erikson, E.H. (1959), *Identity and the life cycle*, International University Press, 小此木啓吾(訳編), *自我同一性*, 誠信書房, 1975.
- 6) Frank, G., "On the validity of hypotheses derived from the Rorschach: V. The relationship between from level and ego strength," *Perceptual and Motor Skills*, 48:375-384, 1979.
- 7) Garwood, J., "A guide to research on the Rorschach prognostic rating scale," *Journal of Personality Assessment*, 41-2: 117-119, 1977.
- 8) 浜 治世, *実験異常心理学*, 誠信書房, 1969, pp. 224-226.

- 9) Herron, W.G., Guid, S.M., & Kantor, R.E., "Relationships among ego strength measures," *The Journal of Clinical Psychology*, 21: 403-404, 1965.
- 10) 片口安史, *新・心理診断法*, 金子書房, 1978.
- 11) 河合隼雄, *臨床場面におけるロールシャッハ法*, 岩崎学術出版, 1969.
- 12) Klopfer, B., Kirkner, F.J., Wishan, W., & Baker, G., "Rorschach prognostic rating scale," *Journal of Projective Techniques*, 15: 425-428, 1951.
- 13) Klopfer, B., Ainsworth, M.C., Klopfer, W.G., & Helt, R.B., *Developments in the Rorschach technique*, vol. I, World Book: N.Y., 1954.
- 14) Klopfer, B., et al., *Developments in the Rorschach technique*, vol. II, World Book: N.Y., 1955.
- 15) Last, U. & Weiss, A.A., "Evaluation of ego strength based on certain Rorschach variables," *Journal of Personality Assessment*, 40-1: 57-66, 1976.
- 16) 永井 徹・水谷由美子・小川捷之「青年期における自己意識と自我機能の関係について一悩みに対する構えの比較一」*ロールシャッハ研究*, XXI: 29-40, 1979.
- 17) 長尾 博「青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み」*教育心理学研究*, 37: 71-77, 1989.
- 18) 中込四郎・鈴木 壮「自我機能からみたあがりに関する研究」*体育学研究*, 28-2: 113-127, 1983.
- 19) 中込四郎・鈴木 壮「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験(I)一Eriksonの相互性からみたスポーツ経験の特徴一」*体育学研究*, 30-3: 249-260, 1985.
- 20) 中込四郎・他「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験(IV)一「相互性」の程度と対象表象一」*筑波大学体育科学系紀要*, 9: 21-29, 1986.
- 21) 中込四郎「人格変容要因としての危機」*筑波大学体育科学系紀要*, 11: 341-352, 1988.
- 22) 中込四郎「ある運動選手の生育史の中で生じた危機様態の分析」*体育学研究*, 32-4: 231-240, 1988.
- 23) Nakagomi, S., "On the athlete's reconfirmation of ego identity and the past crisis mode," *Seoul Olympic Scientific Congress*, 1988.
- 24) 中込四郎・他「運動選手のロールシャッハ反応」*ロールシャッハ研究*, 31:85-94, 1989.
- 25) 中込四郎・岸 順治「運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究」*体育学研究投稿中*, 1989.
- 26) 西平直喜, *青年心理学一弁証法的研究序説一*, 国

- 土社, 1959.
- 27) 西平直喜, 青年心理学, 共立出版, 1973.
- 28) 小川捷之「自我の強さ (Ego strength) の測定に関する研究—その 1—」東京教育大学教育学部紀要, 11 : 107-122, 1965.
- 29) 小川捷之「自我の強さ (Ego strength) の測定に関する研究—文献的研究—」東京教育大学教育相談所紀要, 7 : 67-84, 1965.
- 30) 鈴木乙史, 11章 人格の変容, 瀧本・他(編) 性格の心理, 福村出版, 1985, pp. 178-195.
- 31) 田中千穂子「自我機能からみた夢想起 (dream recall) に関する研究」ロールシャッハ研究XXII : 71-89, 1980.
- 32) 鑑 幹八郎, エリク・H・エリクソン, 荻野・相馬(監), 現代精神病理学のエッセンス, ベリかん社, 1979, pp. 351-374.
- 33) 山科三郎, 人格発達の哲学, 青木書店, 1986.